

朝比奈みくる + わんわん = みくるわん !

re—laive

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

朝比奈さんをわんわんにして「くうん」つて上目遣いでながせた
かつたお話。

〈過去、Arcadiaに投稿したものの改編verです〉

みくるわん

目

次

1

みくるわん

普通、という言葉がある。

別になんということはない、誰もが知るその通りの意味。

一応、辞書などを引っ張り出して調べてみれば

- 1、ひろく一般的に通ずる物事
- 2、どこにでも広く見受けられる共通意識

などといった説明がされたりしている言葉だ。

さて、何故俺はこんな冒頭から今時思春期まつさかりの子供でもしない哲学的な考えをしているかといえば、まあ簡単だ。

普通という言葉の意味を深く考えたいような事態に遭遇してしまっているからである。

ここまで言えばきっと、誰しもが今回の事態はともかく原因については検討がついたであろう。

当然ながらその迷惑な存在の名前は涼宮ハルヒ。

世界を大いに盛り上げるための涼宮ハルヒの団。略してSOS団における団長であり、神かなんかと思うようなくわからん力を持つた局地的台風。いや大天変地異。もしくは天地創造レベルの存在だ。

流石に大げさだって？

十二分に承知している。

だが一般人からすれば、可哀想な人扱いされてしかるべき流言とか戯言なこれは、とても信じたくはないが真実で。

前途したSOS団の団員各自はそんなハルヒを見張る役目で使われたエージェント的なやつらなのだから、これまでの人生で培ったあらゆる常識というやつは無駄だつたらしい。

「キヨンーっ！ あんたいつまでそうやつてボサつとしてんのよ」「いや、世界の普遍について考えていてな」

「なに馬鹿なこと言つてんの？ そんなことよりこつちを見なさい、こつちをつ」

「……あー、ということだが、本当にそつちを見て大丈夫なのか？ 長門」

「平気、問題ない」

「ふえうう、みないでくださいーーっ!!」

「こらー なんでいちいち有希に確認とつてんのよ。これは団長命令 よ、いいから見なさい」

「キヨンくん、お願ひだからみないでえ」

いいかげん、無視できなくなつたのでそろそろ今の状況を説明したい。

場所は教室から渡り廊下を経由して一階に降り、そこから一旦外に出て別校舎へ。

入つたらすぐの階段を登り、どこか薄暗さを感じる廊下の半ばにある一枚のドア。

そこは元文芸部であり、現在の俺のいろんな意味での中心地、頭が痛いことにハルヒの存在とその取り巻きを加味すると冗談でなく世界の極地点でもあるかもしれないSOS団部室である。

で、不本意ながらその我らが部室。

ハルヒの勝手さを具現化したような備品の山が揃えられた大人版子供部屋のごとき空間に置かれたパイプ椅子に座つてドア側をじつと眺めるというある種の奇行を働いていた俺の後ろには、一人を除いたいつもの面子がいらっしゃる。

先程少しだけ声が響いた順番でいうところの、ハルヒ、長門、朝比奈さんの三人だ。

そしてもうめんどくさくなつてきたのでぶっちゃけると、袁れSOS団マスコットであわせられる朝比奈さんは、卑猥といつていい格好に着替えさせられていた。

以上、説明終了。

「ウザい！ なに聖人ぶつてんだかしらないけど、見なさい！」
「ぶぬうつ…」

突然、頭を両手で掴まれると、こちらの身体の向きなんて全く考慮せずぐるりと回されそうになる首。

当たり前のことだが人間の頭部というのは身体と反対に180度向けられて無事なようには出来ていない。

椅子から転げ落ちながらなんとか、まだまだ愛しい首から上との分断を這いつくばつて回避する。

「ぐえ、おまえなつ」

「あはは、なにその動き、面白すぎよキヨン。カエルかなんかみたいじやない。うん、もう一回やつてみせなさいよ」

「二度とやるかアホっ！ おかげで死にかけた、…ぞ」

床に打った膝が痛い。ついでに捻った腰も痛い。おまけに万力みたいな力で掴まれた頭も痛い。

だというのに、俺は文句のために開いた口をボカンと開けたまま、一拳に吹き飛んでいくそれらを忘れて硬直した。

「あううう」

いつもの部室、そこに現れた美の化身。もしくは可愛さをまるごと具現化した聖なる妖精。

彼女は俺と視線が合うと恥ずかしさに身をすくめ、両手で布地の少ない自らの格好を精一杯に隠している。

そんな妖精の頭にぴよこりと除く犬耳。そうあの犬耳だ。
どうでも良いことかもしれないが俺は猫より犬派だ。

犬種といえばコーギーが一番好きだが、ゴールデンレトリバーもな

かなか良いと思つてゐる。

つまりは大小関わらず、触り心地の良さそうな犬が好きらしい。

そしてまさしく、彼女についた犬耳はその通りのものだった。

「……ふかふか、ですね」

「あんまり沢山見ないでください」

「す、すみません。つい」

以前、いつだつたか自称超能力者である古泉が言つていたことがあ
る。

俺はハルヒに唯一干渉できる存在であり、朝比奈さんはそんな俺を
籠絡するために送られた存在ではないかと。

だから彼女は、幼めな容姿で胸が大きくて一見弱々しくも一生懸命
で可愛い、好みとしてど真ん中な姿をしており。

それらすべてが自分を絡めとり、ハルヒのよくわからんパワーを有利に扱うための材料としてある、というやつだ。

そのときは冗談抜かず切り捨て、お仕舞いにしていたが。

ここに来て更にこんなリーサルウェポンまで用意されてくるとなると、否応なく信じてしまいそうだ。

言いにくいくことだが、魂が強く震えていた。

これでは谷口の馬鹿を笑えんではないか。冗談ではない。

頭を振つて馬鹿を追い出す。

「それでハルヒ。こりやなんだ？」

「見てわかんないの？ 犬耳ビキニよ」

「それぐらい見てわかるわ、なんでそんな斬新なものが部室内にあるのか聞いてるんだ」

まだまだ落ち着いていないがとりあえず落ち着け、俺。

元凶たる主犯、いつものことく胸を張つて偉そうにしているハルヒに問いかけるが、返ってきたのは口クな答えではなかつた。

そう、伝え忘れていたが彼女は、現在学生の学び舎たる学校内にいるというのに水着姿をしているのだ。

あまりにも他に気をとられ驚きは薄れたが、一般的なスタイルの高校生には似つかわしくないほど大胆な白のビキニはしかし、彼女に最高なくらい似合っていた。

勿論、付属の犬耳カチューシャを含めてである。そこは外せない。悔しいがグッジョブだ。

だがこれは、少々けしからなすぎないだろうか。

どこのグラビアアイドルかと言いたくなるパーエクトラディと容姿に、愛らしい犬耳。

今までにも、俺にとつては幸福で彼女にとつては不幸であるが、様々に着せ替えられてきたSOS団マスコットである朝比奈さん。部屋の隅に演劇部でもないのに用意されたハンガーラックには大量に衣装がかかり。

それら全てが彼女の温もりを一度は納めた経験を持つている。

個人的には、既にお馴染みという氣さえするメイド服が好みであるが、バニーや浴衣、変わり所では豹の毛皮も中々だった。

しかし歴史はついに覆された。

やはり可憐な少女には犬耳だつたんだろう。

尻尾がないのが残念だが、ビキニに尻尾というと逆に凄まじ過ぎて確実に許容オーバーするためこれで良かつたのかもしれない。

駄目だ、完全に茹つている。

自覚はあるのに止められないぶん性質が悪く、症状も酷そうだ。

今日は帰つたら一旦すぐに寝よう。

その後は、家にいる犬でない毛玉でリハビリもしなくてはな。刺激が強すぎて後遺症がでかねん。

「キヨン。あんた、さつきからブツブツ言つてるけど平氣?」

「ああ、大丈夫だ。問題ない」

「全然大丈夫つて顔してないじゃない。あ！ はは～ん。さてはキヨン、あれね」

なんだよ。

「犬耳好きなんでしょ」

「……っ!?」

「本当は尻尾もつけたかつたんだけど、未完成のわりに十分みたいね」

くそつ、動かせなくなつた視線を追われでもしたか。

こういうときだけピンポイントで正解とか意味がわからん。

あと意地が悪そうにニヤけるな。お前のそれは似合いすぎて怖いんだ。

特撮に出てくる悪の女幹部にでも就職しろ。

「ふん！ なんで幹部なんかしなくちゃいけないのよ。あたしだつたら王様になるわ」

それを言うなら悪の親玉だろ。

しかしこいつは實際、その上の神様になれるだけの力を持つてるだけに性質が悪い。

というかあれか、あまり考えたくない事態ではあるが。

こいつが悪の女幹部、もとい悪の王様になつたとしたらあの映画騒動を超える何かが起こる可能性があるのか。

簡便してくれ。無限に湧いて出てくる戦闘員が地球征服なんぞ冗談でしか笑えないぞ。

「世界が崩壊するからやめてくれ。それでもう一度聞くが、いつたいこれは何なんだ？」

「決まつてるじゃない。世の愚民どもから金を巻き上げるための集金装置よ」

「身も蓋もないな、おい！」

「まあ、その効果もいま実証されたしね。さあ、行くわよみくるちや

ん。手始めに駅前で稼ぐわよ」

「おいよせ、ハルヒ。

今 の麗しい姿をした朝比奈さんでは、なまじ本気で大金が集まつてしまいそうじゃないか。

ちよつとした所で済まない騒ぎが起こつて国家権力が動くぞ。

「いいじやない、むしろ望むところよ。健全な部活動に注意する前に公共風俗の乱れを何とかしなさいって追い返してやるわ」

「アホ、駅前にビキニで行こうつて奴が言える台詞かそれ」

「言うだけならタダよ。もし負けても帰るだけだしね、まあ勝つつもりしかないけど」

「んな無茶な挑戦に人を巻き込むな。ヘタせんとも停学ものだぞ」

「大げさねえ、ビキニが駄目なら夏の海岸で逮捕の嵐じゃない」

「場所をわきまえろつて話だろ」

「はあ、わかつたわよ。冗談よ冗談。まつたくすぐムキになつてイヤね。これだから犬耳好きは」

「ぐつ、確かにそうかもしけんが関係ないだろ」

「まつたく、これだから犬耳好きは」

「わざわざ二回言う意味あんのか、くそつ」

「くつくく。あー、キヨンつたらおかしいわ」

とまあ、なんてことがあつた放課後。
好き放題したかつただけのハルヒのやつを適当に宥めすかして、それも無事終わり。

ああ今日も平和だつたなあ、などと在りもしない平穏を口にしたのがまづかつたのか、事件は遅れてやつてきた。

そう、たかがあれだけの出来事であれば、不本意ながら日常茶飯事。わざわざ普通という言葉について物思いにふけるには足りなすぎた訳だ。

そして平穏はたつた一つの電話によつて、あつけなく壊された。

『涼宮ハルヒの力が発現した』

「は…？」

『対象は朝比奈みくる。現在保護しているからすぐ来てほしい』

帰つてから軽く寝て、飯を食つて、さてテレビでも見るかとおちついた所でチャンチャラ鳴り出す携帯。

掛けてきたのは、あまり豊富とはいえない俺の電話帳を埋め、意外なことに着信頻度も結構あつたりする団員仲間。

端的な口調からもわかる通り、頼れる我らの切り札兼何でもあり担当の長門である。

しかし女というのは話しが好きで、電話とくれば一時間以上もべちゃくちゃやらかすもんだと聞いたこともあるが、少なくとも俺は長門がそのような状態になつたのを見たことがない。

いや、時折あるわけわからん事態に対する長文説明は別だが、あれはあれで女子一般の範疇でないのは確かだ。

ともあれ連絡を受け、向かつた先はもう何度訪れたか分からぬ高校生の一人暮らしには不釣合いな高級マンション。

ご立派な玄関にちやちな泥棒など寄せ付けないとばかりの威圧感あるエントランス。

なんとなくここに来ると、自分がトレンドドラマの登場人物にでもなつたような気さえしてくる。

実際はファンタジーで俺にとつちやミステリー。あとは気分的にハイサテイスファクションだが。

背筋を若干伸ばし、エントランス左手にあるインターホンパネル前

に立つ。

忘れられる筈もない三桁の番号。

708をテンキーで入力し呼び出し用のベルが付いたボタンを最後に押す。

少しの静寂。けれどもそう間を置くことなくぶつんと音がしてインターホンが繋がる。

「長門、俺だ」

『入つて』

「おう」

ツーといえばカー、とも表現すべきやりとりの後、解除される自動ドアのロック。

カシャン。ブンツ、イイーン。

厳かに開く、集合玄関。

誰もいない空間に密かにそれらが響き、そこにタイル張りをコツコツと進む足音が加わる。

やがてエレベーター前にたどり着き、乗り込み、上昇し、ドアから出てそう歩くことなく708号室の前へ。

いつかと、いつものようにベルを使わず扉ヘノック。

人気が近づく気配はないが、不思議能力を横着に使うこの主の意向に沿つて電子錠が遠隔から解除される。

便利なものだ。もしかしたら入り口エントランスでも同じ力を使っているのかもしれない。

「入るぞ、長門」

同棲しているカップルとてもう少し気を使うのではないかと思えるぶつきらぼうさで、見慣れた長門の部屋に上がりこむ。

そこに広がる、一人暮らしの若者が一度は目指すアール・デコ風の整然さとも違う、生活感が薄いだけの居住空間。

段々と物が増えちやきたが、少し前まで部屋にカーテンすらない場所だつたからな、ここは。

あの無頓着星人にはまだまだ地球を勉強してもらつて早く馴染んでもらう必要がありそうだ。

そんなことを考えながら靴を脱ぎ、フローリングの廊下を進み、リビングに歩を進める。

やはりというべきか、そこには威風溢れて鎮座します制服を着た長門の姿。

いや、実際そんなことはないだろうけど、様々なアレコレを知っている今となつてはもう、ただの弱い少女とこいつを思うことはないだろう。

そしてその隣にはもう一人。

「あれ、朝比奈さん？　つと、お邪魔するな、長門」

「いい、座つて」

「……えと、こんばんわ、キヨンくん」

電話口の言葉から予想できていた筈だから、わざわざ驚く必要もなかつたからおかしな反応だつたかもしれないが。

その疑問は彼女の存在ではなく、格好に向けて放つたものだつた。彼女の頭には室内だというのに何故か、ほわつとした深い頭巾のような帽子。

体勢も変に縮こまつていて、如何にも困っていますという様子。そして彼女もまた、学校帰りから直接ここに来たのか制服姿をしている。

「それで今回はいつたいどうしたんだ？」

「涼宮ハルヒの力が発現した」

「ああ、そりや聞いたが」

「対象は朝比奈みくる」

「それも聞いたな」

と、視線を改めて朝比奈さんに移す。

ほわほわ可愛いお顔を今は困惑に歪め、相変わらず室内だというのに頭巾？を被りっぱなしな麗しの美少女。

そこで俺はある不思議な点に今更気がついた。

小柄な体格。

愛らしい童顔。

微妙にウェーブした栗色の髪には艶があり。

潤んだ瞳と密かに震える唇、その他あらゆるパーツが織り成す顔の造詣は、問答無用の可愛さを作り上げている。

あと巨乳。

うむ、まじうことなき完璧な萌えキャラだ。
いやいやまたまた、違うだろう。

今言いたいのはそういうことじゃない。

「すみません、朝比奈さん。その帽子っぽいものをとつてみてもらえませんか」

「…うう、はい」
「つ……あ」

どこか悲しげに「でもしようがないよね」という諦めを交えながら頭巾か帽子かわからないものに手をやる朝比奈さん。

ある一つの予感に身を硬くしてその光景を注視していた俺は、しかし驚きを抑えることは出来なかつた。

布地の下からふわりと現れる二つの物体。

それはつい数時間前、放課後にも見たあの素晴らしい、もふもふの具現。

否、先の偽物とは異なる魂の籠もつた本式。
犬耳、リアルバージョンだつた。

「ど、どどどどお」

「落ち着いて」

「いや、だが、…長門、これは」

「犬耳」

「あ、うん。 そ うだが」

「今は隠しているけれど犬尻尾もある」

「なつ!? どこなんだそれはっ! あと形状は? 耳はコーギーっぽいから尻尾はカーディガンのちよんもり尻尾か?」「ふえええん、キヨンくんスカートめぐらないで〜」

くつ、駄目だ。

手を止めたい気持ちは山々なんだが、朝比奈さん、あなたが犬耳をぴくぴくすればするほど熱が胸くなつて。

「落ち着いて」

ぼこん!

「…うぐ、すまん、取り乱した。朝比奈さんにも大変申し訳ないこと

を」

「い、いえ、ちょっとびっくりしましたけど平気ですから」

クールを通り越し、静かなること山のことしきを忠実に体現する長門にとつては珍しい物理的直接攻撃な突込みを浴び。

ようやく、遙か彼方へ旅立ちかけていた脳が正常稼動へあと目前とぐらいまで戻る。

野獣のごとき豹変におびえていた朝比奈さんにも丁重に土下座し、

居住まいを正したあとは視線を下げて俯く。

長時間の直視はまだ危険と判断したことだ。

「話を戻す。これは恐らく部室で着用したカチューシャに宿っていた犬耳美少女とはこうあるべき」という製作者の深い願望と、涼宮ハ

ルヒが考えていた“特殊性癖の人間に對し、強い影響を持つて魅了しろ”という願望が相互作用を起こしたことで偶發的に起きた事象。本来力チューシャだつた物質がこうして変容したのも、より強度を増すためと想定される。この強度想定における基準は恐らくあなたに全てが委ねられている。それは朝比奈みくるに装着された力チューシャに対するあなたの反応が大きいものであつたから。しかし本来、涼宮ハルヒはあなたに特別な執着を持ち、それを許していない。だけど、今回の場合に限り彼女はこれを例外と見ている。理由は犬耳をつけた朝比奈みくるに対するあなたの反応が、あくまで純粹な嗜好からくる好意だったと認識したため。これは涼宮ハルヒがあなたの妹に感じている認識にほぼ類似する。つまりは愛玩に近いもの。よつて非常に希有な状況が成立している

「ふむ、何でも俺の思い通りになるつてことか？」

「え？　え、ええ？」

相も変らぬ息継ぎを感じさせないマシンガントーク。

いやまあ、マシンガントークという響きから連想するとハルヒの方がよっぽど似合っている氣もするのだが、しかしあいつほどになるともはやガトリングの十字放射かそれ以上となるので、やはりマシンガントークの座は長門でいい。

その、いつもならばあつけなく投げ出していくてもおかしくない集中攻撃を浴び、けれど今夜の俺は全く無傷だつた。

なにせ信じられないことだが、この全知全能としか思えない宇宙人の言葉は、脳ではなく魂に染み入るほど俺の望み通りなのだ。

好きこそ物の上手なれ。

まさしくそんなことわざが相応しく、自分の好みな物事には知識も熱意も集中するから理解力があがる。

しかし、念のために確認はせねばなるまい。

誘蛾灯にふらりと寄つていつたら世界が終わりかねないのがここ最近の常だ。

普段から、傍にはいつも太陽を目指して突き進む団長様もいらっしゃるしな。

「しかし、それでは朝比奈さんの意思があまりにも蔑ろになつていなか?

「それについても問題ない。今の朝比奈みくるは、わんことなつた朝比奈みくるであり、言うなればみくるわん。このため、彼女と彼女の異時間同位体が憂う後身を気にする必要はなく、内外の観測者達に考慮すべき影響もない。又、朝比奈みくるが持つていた私心はどうあれ、みくるわんはあなたに多大な好意を抱いている。今も本当はごろごろ甘えて擦り寄りたいとずっと思つてゐる。それら全ては今回行われた涼宮ハルヒの力の発現によるものであり、同時にそんな彼女に対するあなたの感情も一時的な特異と見るに事足りる。ならばそこに生まれた可能性がどう帰着するかはもう別問題」「なるほど、犬に噛まれたと思えばいいと」

「概ね、そう」「え、ええっ!!」

長々とあつたが、簡潔に説明するならばこうだ。

今日の放課後の出来事、犬耳コスプレの件が発端となつてハルヒのはた迷惑な力が発動。

その際、必死で宥めすかしてお流れになつた集金計画に心残りがあつたかしらんが、それも含めあいつは朝比奈さんに犬耳つけて愛玩的な役割でもやらせたら俺の反応が面白い、とでも考えのだろう。

それが他ならぬハルヒ以外の存在が思つたことならば、馬鹿いうんじやねえの一言で済んだ。

しかし現状、俺の目の前には犬耳に加えて尻尾までついている、リアルけものつ娘少女。

更にここからが大事なことだが

「なあ、長門。みくるわんとなつた朝比奈さんを元に戻すにはどうし

たらしいんだ?」

「簡単、あなたの持つ欲求を満たしたら良い」

「ふええーーっ!!」

やはり、そういうことなのか。

目を白黒させて驚く朝比奈さんには悪いが、どうやら今回の事態はなんとも特別性らしい。

なにせ他称宇宙人であり、自称情報統合思念体によつて作られた対有機生命体コンタクト用ヒューマノイド・インターフェースである長門が「非常に希有な状況」と言うほどのこと。

今まであつた世界改变クラスのトンデモに規模さえ劣るが、俺もたしかに珍しいことには同意せざるをえない。

予測が合つているのだとすれば、ハルヒの持つた「特殊性癖の人間に対し、強い影響を持つて魅了しろ」という願望に対し、目に見えることのない魅力たる数値を算定、具現化させる役割を持つのは俺なのだ。

それはこれまであつたどんな状況にもなかつた要素である。

「それ以外の方法。例えば、おまえの持つ力で何とかすることは出来ないのか?」

「多少の齟齬はあれ可能。でも、涼宮ハルヒが他者にその力の一端を委ねた今回の事態は貴重」

「つまり?」

「情報統合思念体は静観を指示してきている。わたしもあなたと朝比奈みくるに不都合がない限り静観したい」

「だが、俺はともかく朝比奈さんにとつては既に絶賛不都合発生中だと思うが」

「それは表面上。だからこそこうして選択の機会が成り立つていてる」

「機会? 本当にこれを機会と呼んでいいものなの?」

今やあわあわを通り越して、もじもじを経由し、すっかりめつきり

白く燃え尽きてしまったような朝比奈さんに視線をやる。

長門はそんな俺たちに構うことなく、いや、別の意味では構つてくれているのだろうがお茶を入れに立つ。

程なく人数分の湯飲みが置かれ、三人が共に無言のまま淹れられたお茶をする。

「……」

言葉なく、だけど目線で徐々に彼女へ向かって「大丈夫ですか」と確認の意思を送り。

ようやくそれに返事が来たのはお代わりで再度淹れられたお茶がいい加減無くなる頃だった。

「あの、朝比奈さん。変におもんばかりのとか苦手なんで、かなり直接的に聞いていいですか？」

「うん、……はい」

「朝比奈さん的に、今回の件はどうお考えなのでしょう？」

可哀想なほどに庇護欲をそそるおどおど顔。

それがやつとこそさ落ちついてきた所でこんな質問をすることは、我がことながらなんて酷いやつだろうと思う。

だつてこの問いかけに逃げ道らしい逃げ道はないのである。

ここで絶対の力を持つ、穩便であろう解決の手段を持つ宇宙人は静観の姿勢。

そして彼女の言うことには、朝比奈さんの背後、きっと大人バージョンの朝比奈さんも含めてそちら側の組織も静観。

で、今回に限りなんとか出来るかもしれない力を授けられた俺でさえ、根本的な想いとして静観。

もとい積極的介入の意思を持つてているのだ。

無論、ここでどうしても嫌ですと言われば、あの手この手を使って何とかしてやろうと考えているが、こんな状況では立場的にも心情的にも嫌だとは言いにくいだろう。

「……あー、うん、そうだよな。」

長門から少し気になる発言もあつたが、わざわざ追い込むような真似をするのはフェアじゃない。

このやり方では、まるでまつたく脅しそのものだ。

「いや、申し訳ない。やつぱり、ここは別の手段で」

「待つて！ キヨンくん」

「えつ……？」

「あの、確かにあたし、すごく困惑しますけど、不思議なことに嫌じやないみたいなんです。だから」

きゅっと制服の端を自分で握り締め、向けられた瞳にはもう怯えの色は殆どなかつた。

もしかしたら犬耳に異常なまでの反応を示した俺に配慮してくれているんだろうか。などと瞬間思つたが、どうやらそれとは違う、彼女自身の意思ともいうべきものが立ち昇るのが分かつた。

おかげで時間がかかりはしたが、処理能力の低い俺の頭にも朝比奈さんの言葉の意味が浸透していく。

「良いんですか？」

「はい。……あ、でも、あんまり酷いのはやめてくださいね？」

「それは、もちろん」

といつても、わんわんになつた朝比奈さんをどう好きにしてもいいという条件はあまりに破格だ。

元々からして隣に立つのも気後れしてしまいかねない美少女である彼女。

そこに倒錯的なプレイともいえる、わんわんが加わるとなればちょっと精神がアブダクトされかねない事態といえる。

俺とて本物の犬に通じる愛玩的感情とは別に思春期男子的な強い欲望もある。

四つんばいになつたみくるわんに首輪つけてお散歩したい、とかい

うぶつ飛んだ想像すらギュンギュン浮かぶのだ。

危険極まりない。

などと、不用意にもほんやり考えてしまったのがいけなかつた。スパンと、

本当に予兆もなくスパンと湯飲みを置いてフリーになつて いた手のひらがいつのまにかコードのついた持ち手を握つて いる。

なんだこれは、と視線は自然と長く伸びたコードの先にいる朝比奈さんに向かい

「ぶぼつ、…!?」

「え？ ふわつ、わわわわわ」

コードは彼女の首筋に伸びていた。

正確には、これまたいつ付いたのかもわからない彼女の首輪へと。若干余裕のある構造をして いるのか当事者二人が共に驚いても「ぐえつ」となることは無かつたが、安心できたのはそれだけだ。

「キヨンくん、見ないでーつ!!」

「す、すみませんっ」

加わる物あれば、減る物あり。

明らかにペット用とおぼしき首輪と散歩コードが増えた代わり、綺麗すっぱり消されてしまつたものもある。

それは朝比奈さんの着ていた服全て。

表層を覆つっていた北高制服のみでなく、だからつまり上下の下着すらも綺麗さっぱり無くなつてしまい。

おかげで彼女は突然の事態により全身くまなく肌色に。

あつけにとられ、わけもわからぬ驚きでまじまじと各部確認してしまい、慌ててそっぽを向いたが既に時遅し。

まぶたの裏に鮮明に残つてしまつた美少女の姿。

それは芸術家達が絶賛するヴィーナスを個人的には一桁超えた神

聖な美しさ。

もう出来るならば、脳内美術館のメイン展示物として毎日でも眺めたい光景だ。

恐らくそんなことをすれば鼻血だけで出血多量になる自信があるが。

「すっ、あのっ、…ちよつと、部屋をでますので服をなんとかつ、いや、ほんとうにごめんなさいっ！」

「うわあああん」

バタバタと長門家のリビングを逃げ出し、浅からぬ事情で中腰のまま玄関まで避難。

背後からは何とも表現できないケモノのような泣き声が聞こえる。しかし、いつたいなんだというのだ。

ゼーゼーばくばくと痛む肺と心臓を深呼吸でいたわりながら、出来るだけ肌色を思い出さないようにして先程の原因を考える。

ハルヒの力で朝比奈さんはわんこに。俺には彼女をより萌える存在に改竄する力が身に付いた。

治す方法は俺が彼女、みくるわんがもうこれ以上ないくらい可愛いわんこになつたと満足すること。

一応、長門も治す方法を持つてはいるが、出来れば上記のやり方で解決してほしいと長門もその親玉も思つてはいる。

朝比奈さんも困惑気味ながら了承。

そこで俺が妄想たくましく、彼女に首輪つけてお散歩したいと思いつぶかべてしまつた。

直後、みくるわん肌色に。

しかも首には、犬用の首輪とリードのための紐。あまり考える必要もなかつた。

明らかに俺の所為。といふか突然に謎の力を得てしまつた愚か者による暴走だつた。

ハルヒよ、すまん。

お前を常々暴走超特急と思い、辟易してきたが、俺より数倍マシかもしだ。

このままではいつたいどんな工口恐ろしい事態が起ころのか自分でも想像がつかない。

何でも適うということがこれほど厄介だとは想像だにしなかつた。神様つてやつも大変だな。こんなもんあつたら絶対破滅する。いや、神話つて結構ろくでもない話が多いし、彼らも彼らで苦労したのだろうか。

今ならその気持ちの一端が理解できる。

南無南無。

「えと、キヨンくん」

「え、ああっ、は、はいっ」

「一応、入ってきて大丈夫です」

「そ、そうですか、では、失礼させていただきます」

なんて狼狽し、役にも立たない考察と反省をする間にも、朝比奈さんの方はなんとか立ち直ったようだ。

いや、違うか。何につけても今この現状を改善するのは俺か、俺の意思が必要であると考えたんだな。

このあたりの気持ちの切り替えは、さすが上級生と尊敬の念が浮かぶ。

誰かに道を示してもらわないことには中々動くことの出来ない自分で到底持ち得ない強さだ。

とにかくこちら側とすれば、それに甘んじることなくまずは謝罪だ。

故意ではなかつたにしろ、乙女の柔肌を無理やり暴いてしまつたのは確か。

示談金を出すなら貯金を全てはたくのも覚悟しよう。

勿論、それ以上というならば出来る限り応じる。

そう思つていたのだが。

「じゃあ、恥ずかしいですけど行きましょうか」

「気をつけて」

「はあっ!? いや、待ってください。やつぱ辞めませんか？ 危険すぎます」

「けど、こうしないと元に戻れないし」

「それについてはもつと深く広く考えてみましょう。きっと他に良い手立てが」

「今のみくるわんの状態を完全にレジストできるのはあなたの欲求を満たすしかない。それ以外の方法は誤魔化しに過ぎない」

「ぐつ、このタイミングで退路を塞がんしてくれ、長門」

「でも本当のこと」

リビングに入った俺を待っていたのは、タオルケットをぐるりと全身にかぶりこちらを窺うみくるわんと、特に何も変わることなく整然とした様子のいつも通りの長門だつた。

なにはともかく、すかさず予定通りに謝罪。

その後、何故みくるわんがタオルケットに包まれた状態だったのかを聞いた俺は思わず啞然としてしまった。

彼女の着ていた制服とともに、それ自体は部屋の片隅に畳まれて置かれていたらしいが、いざそれを着なおそうとした所、あれよあれよとよく分からぬうちに畳み直して、床に置いてしまうらしい。

三度挑戦して諦めて、しようがないから長門の服を借りようとしたがこれも駄目。

どうにもいかないのでタオルケットをかぶることになつたそうだ。

これについては長門曰く、「みくるわんをわんことして見るあなたの深層意識」が原因じやないか? ということだ。

確かに俺は服だけならともかく、下着までつける犬などありえないと思っている。

そしてたまに見かける、ペットに服を着させて散歩させる飼い主をなんとなく毛嫌いしていたのも確かだ。

よつてわんことなつた朝比奈さんは素っ裸がデフォとなり、服を着ることが出来なくなつているとのこと。

これについては何とか考えを改め、下着は不可だつたが上下一枚ずつの制服だけを着させてあげることは出来た。

だが、それだけ。

ブラウス一枚では溢れんばかりの何かが透けて見え、下も下で尻尾が邪魔になつて簡単に布地がめくれ上がる。

よつてタオルケツト再びである。

しかしそんな状況にも関わらず、朝比奈わんこ、改めみくるわんはまだ散歩に行く気持ちがあるらしい。

なんともあっぱれな覚悟。

世が世なら一角の武将にもなれたかもしない。ただ、それ以外があわあわだからやつぱり無理か。

それにつけても何故平気なんだ？ 女の子がほぼ裸で首輪をつけられて外を散歩だぞ。

長門が通常空間から特定の空間を切り出し、位相を操つて認識をずらす結界とやらを使用してくれるから問題ないらしいが、本当なら即お巡りさんに捕まつてしまふべき裁きを受けなくてはならないような所業だ。

無茶すぎる。

「ね、キヨンくん。長門さんの言うとおりこれが一番確実な手段つてことは間違いないみたいですし」「それにしたつてあまりにも」

「あたしなら平氣です、なんとか頑張つてみせます。だからキヨンくんも上手く手伝つてくださいね」

「は、…はあ」

「それに」

……形は不自然だけど、何もかも全部気にせずデート出来るの、こ

んなことがなくちや不可能だから。

「え、…？」

「う、ううん。なんでもないんですつ！ それよりほら、どんどん時間が遅くなっちゃう」

「もう」

途中、ぼしょぼしょぼしょと何か言葉をこぼし顔を赤らめた様子が少しだけ気にかかつたが、ここへ来たのだって夕食後だからぐだぐだしているうちにもう結構な時間帯だ。

あまり長く悩み続けることも出来ないし、明日にも響く。

「すみません。じゃあ、ちやつちやと終わらせて解決しましよう」

「はい」

「なんとか安全に終わらせてなるべく見ないようにしますから。申し訳ないですが暫くの辛抱を」

「うん、キョンくんのエスコートを信じてますからきっと平氣です」

* * * *

そうしてついにスタートすることになつてしまつた深夜のお散歩。俺の手にはペット用のリード。繋がる先は当然ながら危うい恰好の朝比奈さん、もといみくるわん。

うん、もう精神的にいろいろマズいからいい加減腹を据えよう。彼女はいまわんこだ。変に気を使いすぎていちいち恥ずかしさを刺激させるのはよくない。

やりすぎは絶対にしないし、全身全霊で守り抜くことには変わりないが、いつもの彼女とは別だと思つて対応しよう。

「さて、行きましょうか？」

「はい、……わん」

「ふぐっ!!」

玄関をそつと音を立てないように出て、いざみくるわんと進もうとした矢先、腰がくだけた。

「あ、ごめんなさい。変でした？」

「いえ、すぐ可愛いと思います」

「そうですか？　えへへ」

おい俺、なにを言つてるんだ。なぜ止めん。

そしてみくるわん。どうしてそう楽しげなんだ？

「では改めて出発します」

「はい、わんわん」

結局、彼女のふんわか笑顔にほだされ。開始早々に中断した散歩が、よりわんこと飼い主っぽくなつた状態で再開される。

但し、常に前を行くのは様々な面を考慮して俺だ。

はつきりいつて後ろを歩くと見えてしまうのである。その、彼女のアレとかアレがだ。

上はブラウス一枚で、下はスカート一枚。

しかもお尻から突き出した尻尾がふりふりと動き回るおかげで、立つて いるならまだしも四つんばいだとかなり危ないことになる。

だというのに、みくるわんはまるで本物のわんことまではいかないが、かなり無防備だ。

今だつて返答の際、よいしょと首を上に向けて一生懸命こちらの顔を覗いてきていたが、そうすると透けたブラウスから立派な女性の魅力がふんだんにアピールされてしまうのだ。

それが無くたって、このシチュエーションだけで男ならば十二分に鼻血もの。

なんとなく分かつてから目を逸らしていたが、そうでなかつたら中腰になつて出発は更に遅れていただろう。

おつと忘れずに首をどんどんしておこう。予防というのは大切なからな。

「キヨンくん…？」
「あ、すいません」

先程から謝つてばかりだな、俺は。

だけどもなんとなく、この謝罪の回数はまだまだ伸びていく確信がある。それだけ今の状況はやばい。

そうして行きに来たときは逆にエレベーターを降りて、エントラントスホールから外に出る。

ちなみにみくるわんはずつと膝をついた四つんばいのわんわんスタイルだ。

痛くないのかつて？

どうやらその辺りは、いつの間にか平氣なようになつてしまつていた。

ここでちよつと説明しておくと、現在みくるわんにかかるつている力は大まかに三つある。

一つ目は勿論、彼女がわんわんになつてしまつていてこと。

二つ目は殆ど裸の状態で服が着れなくなつたのと首輪が外れなくなつたこと。

最後に長門にやつてもらおうと思つていた他人からの認識遮断を含め、散歩における懸念が幾つか消えていること。

前二つはともかく、後ろ一つはなんとも安心な話だが、じゃあどうしてこうなつたかとなると難しい問題になる。

どうしたつて完全な正解を知る術は持たないのだから考察は無駄かもしれないが、けれどそれでわかつたこともある。

なんと、この現象にはストッパーがあるらしい。

らしいというのは長門による推測のためだが、あいつの言うことならほぼ間違ないと俺は信頼できる。

あいつは嘘を言わないし、あいつが分からぬような事柄は人類の誰にだって分かるわけがない情報だからだ。

そんなわけでほぼ確定情報扱いとなるそのストッパー説だが、どうやら元の朝比奈さんの意思が関わっていて彼女が本気で嫌だと思う事態は絶対起きないように出来ているというのだ。

正直、なんじやそりやと思つた。

だつて彼女は現在進行形でわんわんとして散歩中なんだ。
もし自分がそうなつたら世を憂いて身投げしかねん事態と言つていい。

でも、本人に確認をとつたところ顔を赤くし、はわわと困った様子だつたがぎりぎり我慢できる状況だと口を割つてくれた。

当然ながらそこには俺や長門に対する気遣いが多分に含まれていることは間違いないだろうが、それにしたつて凄まじい忍耐だ。

だが彼女はハルヒによる数々の仕打ちをうけても、最終的には笑つて許してしまえる聖女みたいな人。

本当に我慢してしまえるのかも知れない。

しかしここで重要なのが、朝比奈さんにふりかかった謎の力において、ただ一つだけ起こつた例外だ。

それは一旦全裸の状態となつて服が着られなくなつた所から、限定的だが上下セットの制服を着用できた事である。

このとき肝心なのは同じく長門のあげた仮説。
彼女を裸にしてしまつた要因が「みくるわんをわんことして見るあなたの深層意識」であつたというやつだ。

確かにそれによつてみくるわんは犬としての通常形態である全身肌色となつてしまつた訳だが、そもそも俺は根本的にわんこは勿論朝比奈さんについても酷いことなどしたくはない。

これが前提にあるとすれば、彼女の意思がストッパーとなつている可能性は極めて高いのかもしれない。

だつて俺は朝比奈さんに本気で嫌だつて言われたら、結果として自分が酷い目をみるとしたつて何かすることは絶対出来ない。

なのでもしかしたらだが、彼女に強い否定の意思があれば、このわんこ化を最初から消してしまえたかもしれない。

と仮説だらけの推論により幾ばくかの安心を持つていられたのは、散歩が始まつて五分ほどまでのことだつた。

「あ、ちょっと止まつて下さい。わん」

「ん、…どうしました？」

マンションを出て暗がりの道を歩くこと暫し。

幸いなことに見える範囲の通りに人影はなく、それでも警戒と緊張でドギマギしていた背中に子犬のような可愛い声がかかる。

「そのままこちらの方に」

「えつ、はい」

「じゃあ、少し待つててくださいね」

「？ まあ、いいですが」

慣れない四足歩行のため、テシテシとゆつくり進行していく散歩がみくるわんの意向で停止する。

訳も判らずその後の指示に沿うと、やつてきたのは道路の端っこ。この時点でなんとなく嫌な予感はしていたが同時にまさかと樂観もしていた。

確かにわんこならやるのが当然だとしても、さきほどの考察からいつてスルーされて当たり前と思つていたからだ。

だが

「ちよつ、えつ、うおつ」

「ひあつ、キヨンくん、今はこつち向いたらダメですっ！」
「ごめんなさい。本当に申し訳すいませんっ」

ずっと続けていた四つんばいからよっこいしょと腰を落ち着け、手を地面から離す、みくるわん。

そうして形作られるお尻を浮かせた体育座り。

これから何をしようとしているなど、考えるまでも無かつた。

犬のお散歩に必須の行為。マーキングという奴である。

いや、じゃなくて、待ってください。一言声をかけてからしてもらえば目線をやることなんてしませんよ。

ていうか、あわわわわわわ。

「それ絶対だめなやつですから！ それだけは無しで！ ほんと無しでお願いします！」

「ふええー、……」

あなたは曲がりなりにも女の子で。まあ今はメス犬ですが、つてメス犬なんて表現するとなんか一気に卑猥さが増して。

くそ、犬耳美少女の野外散歩マーキング（未遂）とか、もう本当に危険すぎて訳が分からなくなってきた。

「だつて、唐突におしつこさせてつて言うの恥ずかしかったですし、……くうん」

そんなもん絶対いまよりマシな恥ずかしさだと断言できますから。いきなり冒険しないで下さい。

ん？ までまで、まずそこが問題だろう。

幾らなんでもマーキングは駄目だ。

道路の端っこでそんなことするのは醉っ払ったおつさんぐらいで小学生だつてやるなら隠れた場所でやる。

あとは本物の犬ぐらいだが、んや、現在の彼女はわんこではあるが、しかし大部分は女の子であり外でおしつことなど。

どうにかこうにか説得し、認識を改め、犬的衝動を留めてもらう。

さすがにそれは理性がやばい。心持ち中腰の体勢になつてしまふのも仕方がないだろう。

身体の奥で何かが跳ね上がり、密室へ投げられたスーパー・ボールみたいにして駆け回る。

もはや萌えを通り越し、ぼえーっとなつてきた感がある。

「キヨンくん、はやくー」

「つて、先に行かないでください。ちらちら見えそうっていうか、あ、危ないですからっ」

かくして散歩は続けられ、俺達はたまたま通りすがつた他人との遭遇八回、再びのマーキング（未遂）一回という経緯を辿り。最終目的地に指定していた小さい自然公園へ来ていた。

「どうぞ、ただの缶ジュースですが」

「わあっ、ありがとうございます、…わん」

俺のなかの貧相な頭脳が導き出す犬の散歩の定番といえば、家から往路三十分以内の範囲を回りつつ、途中の公園で自由に遊ばせてやり、満足したなら帰る。というものだ。

そしてこの漠然とした感覚こそが、現在実地している散歩の重要な指標となっている。

俺が彼女を可愛い愛玩的な存在として扱いその魅力を高め、満足することで今回の騒動は終息する。

だからこそわんこ扱い。

ただ長門の家でお茶を飲んでいたように人間扱いするのも、きっと反則ではない。

なのでこうして労いと謝罪と胸に秘めたお札を込めて、誰もいない公園のベンチで一息つく彼女に飲み物を進呈しているのである。

「それにしても参りましたね、意外とこの時間でも人が居て」
「はい、驚いちやいました。でも、キヨンくんが庇つてくれたから心強かつたです」

いざその時が訪れると、実際に不思議な認識阻害の力とやらが効いているか心配もあり焦つたりもしたのが。

どうやら俺も含めて完璧にその機能は発揮されているようだつた。その際、びくびくしたわんこが足の傍にまとわりつき、何かがふにふにしたりすべすべしてきて、そつちの方が厄介だった。

どうにかこうにか公園にあるベンチに赴き、みくるわんを待機させ、進んで飲み物調達役となつたのはそのためだ。
はあ、やたら疲れた。

咄嗟にコーヒーを選んだが、このぶんだと俺もみくるわん用に買ったオレンジジュースでよかつたかもしれん。

理性フル稼働のおかげで脳が焼け付しそうだ。

「ね、キヨンくん。なんかこういうの、楽しいですね」

「あー、確かにそういう感情があるのは否めません」

「もう、その言い方だとなんだか嫌々みたい」

「まさか、遠慮なく表現すれば最高な気分ですよ。ほんとに」

特殊な状況。夜の公園。ベンチに二人。

こうしているとあの七夕の夜を思い出す。

タイムトラベル時の強烈な不快感でぶつ倒れ、朝比奈さんの膝枕を味わえたあの日。

その後すぐ朝比奈さん大人バージョンの到来により慌しく事態は

進行していくのだが、それさえなく、ついでに時間的余裕もあれば是非とも若者の会話にでも勤しみたいと思つたものだ。

なんて考えていると突然ふとももの上に重みを感じ、えつ、と意識が戻された。

「わうん」

「あのー、みくるわん？」

「ふふふ、……くすくす」

この状況に考えることは一緒だつたのか、はたまた俺のよこしまな希望を読まれたのか。

先手を打ち、俺の脚を枕に寝転ぶみくるわん。

ここからでは顔の表情は見えないが、代わりにふかふかの尻尾と耳がこれ以上ないくらいご機嫌な様子で動いている。

うーん、無邪気だ。

人気のない夜の公園で男と二人、つて状況はもつと過敏なくらい意識してしかるべきだと思うのだが、まったくの無警戒。

それはもう俺のベッドで安眠を貪るシャミセンなみと言つていいほど安心しきつている。

肉食動物からしたらまるまると美味しそうな羊だというのに、その目の前でぐーすか寝てしまう危うさ。

本人に自分が極上の美少女だという自覚はないのだろうか。

「キヨンくんの太もも、かたいですね」

「まあ、男ですかね。快適な寝心地は提供できません」

「んーん、快適ですよ？ こうしてるとすぐ安心して」

「ごろごろごろる。

「ね、キヨンくん」

「はい、なんでしょう？」

「なんでもないです、…ふふー」

上目遣いでこちらを見て笑つたり、枕にした俺の脚を指でつついて遊んだり、さつきから凄く楽しそうなみくるわん。

わんことしたら散歩が嬉しいのは正常かもしねないが、しかし人間として見たらかなり酷い目にあつてはいる筈なのだがなあ。

だいたい、服もろくに着させず首輪をつけ四つんばいで外を散歩、なんてどう考えたつて軽蔑ものの行為。

俺の所為ではない、といいたいとこだけれど、そうとばかりも言えない今回のドタバタで。最悪、口もきいてもらえない事態だつて有り得ただろう。

それでもこうして嬉しそうな感じでいられる、ほつとすると共にこちらまで嬉しくなる。

我慢できず、耳をなでなで。

感触はふにふにのふあふあ。

みくるわんもその行動に目を細めて気持ち良さそうだ。
なんとも和む可愛いわんことのやりとり。

けど、

「ね、キヨンくん」

「はい、今度はなんですか？」

「キヨンくんつて、キス、したことありますか？」

そこへ唐突に投下されるドキつと1オクターブほど鼓動が高まる質問。

「いえ、……一度もないですが
「えへへ、そつかー」

顔の表情は依然として見えない。

でも犬耳がちらちらとこちらを気にして、答えのあとには犬尻尾が

ふりふり暴れている。

くうつ、危ない。あんまりそつちに視線をやると目の毒すぎかる。
スカートなんかとつぐにめくれ、肌色が殆ど丸出しだ。
否応なく、高まつた鼓動がビートを刻みだす。

「じゃあ、好きな人つていますか？」

「え、あ、しいて言えば朝比奈さんですかね、やたら可愛いし
…………つて、ぬおつ！」

「ふあつ、わわ」

原因をあげるなら脳が茹りきっていた、というほかあるまい。
男なら誰でもが一度は受けてみたい魅惑の質問。

ゆるい空氣に当てられ続いていた意味のない会話の最中、ふと紡が
れた告白の定番みたいな会話。

こんな状況がにわかに信じられず、ついほんやりと迂闊に地滑りを
起こした己の口。

覆水盆に返らず。

後悔は先に立たず。

口は災いの元。

いつの世にもこれらを気をつけると沢山の格言が残っているとい
うのに、人は失敗を繰り返す動物らしい。

「えっと、さつきのはほんとのほんとに？」

「うつ」

「どうなんですか、キヨンくん。大事なことですよ」

「嘘ではないです」

「それじゃあ、ほんとなんだ」

「そう、なりますね」

だが、そんな切欠が言い方向に転がることだつてあるらしい。

どうしても歯切れが悪くなる俺の言葉にどんどん被さつてくる追

撃。

その様子は宿題を教えてとせがむ妹だつたり、調子に乗つて勢いづくりハルヒのよう。

だからなし崩し的に気持ちを白状させられて、そのたびにパタパタする尻尾から彼女の感情も読み取れてしまう。
気が付けば、頬を染め、どこかいたずらっぽい顔がじつとこちらを見つめている。

なんとも俺の琴線に触れる「遊んで遊んで」とせがむ、わんこのような表情。

その顔がそつと近づいてきて
かぶ
首筋にかみついた。

「はむ、はむはむ。……うん、よし」

「いえいえ、なにをしてるんですか」

「ふえ、わかんないですか？」

「わかりませんよ。今の流れのどこに噛み付かれる要素がありました？」

「だつてキヨンくんが言つたんじゃないですか」

「え、…？」

「『犬に噛まれたと思えばいい』って」

だから、今からのキヨンくんは好き放題されても文句いえないんですけど。

そんな言葉と共に、そつとベンチに押し倒される。

上に乗るのは、学園のアイドルであり、SOS団唯一の癒しキャラであり、守つてあげたくなるような可愛らしい先輩。
それが星を背後に降ってきて
近づく顔と顔。

ちゅつと音をたて触れ合う唇。

離れる間際にはペロリとおまけつき。

「いまだけ、ほんのちよつと夢を見させてください、わん」

唚然とするこちらに、瞳を濡らした子犬がそんな願いを囁きかけた。

それから一週間と少し後の光景。

『涼宮ハルヒの力が発現した』

「は…？」

『対象は朝比奈みくる。また犬耳と尻尾がついた。現在保護しているからすぐ来てほしい』

「ちょ、ちょっとまつてくれ長門！ どういうことだ？ 今日は休日だつたし活動も無かつたぞ」

『前回の残り火』

「なつ、あれ治つてなかつたのか？」

『わからない。検証が必要。だから前回の時と同じ行動をトレースする。今度はわたしもチェックする』

『いや待つてくれ、それはマズイ』

『大丈夫。そのためにわたしもつけたから』

「は？ なにを？」

『じゃあ、急いで』

ガシヤン。

「え、いや、え……え、どうした?」

end